【連載タイトル】「ファミリーレスの老後を生きる人々」

【第７章タイトル】
『親と離れることの是非』

【第３回タイトル】
『ゴミの地層に家族の歴史を見る』

蒲田雅史（仮名：85）の自宅はゴミ屋敷だった。アップライトピアノの上に置かれていた２つの骨壷は、若くして亡くなった娘と数年前に亡くなった妻のものだった。

作業を請け負うＬＭＮの代表理事・遠藤英樹氏が説明する。

「ゴミの地層を掘っていくと、家族の歴史がわかります。娘さんの部屋には THE BLUE HEARTS のＣＤ、その下の地層からはチェッカーズのレコードなどが出てきました。音楽が好きな女の子だったようです。別の部屋からは娘さんの出生届が見つかりした。１９６８年生まれでした」

友達との交換日記なども出てきた。当時流行った丸文字で、日常の他愛のない事々が綴られていた。

骨壷には亡くなった日時が記されていた。享年 18 であった。死因は分からない。

「どおりで、どの地層を見ても、娘さんが大人になってからの痕跡がないんです。部屋が散らかり始めたのはどうやら娘さんが亡くなってからだったようです」（遠藤氏）

家主である蒲田雅史氏は現在入院中だ。認知症の症状があり、意思の疎通は難しい。ただ、ゴミの地層は家族の形を雄弁に語っていた。

各地層から旋盤や工作機器のテキストが出てきた。蒲田氏は職業訓練校の教員だったようだ。妻は几帳面な性格で、数十年に渡って家計を付けていた。ただ、それも 10 年ほど前の日付を最後に途切れていた。代わりにその上の地層からは、古くなった大人用紙おむつや、リハビリパンツなどが出てきた。

妻は晩年介護が必要な状態だった。妻の骨壷には５年前に亡くなったことが記されていた。ちょうどその頃からコンビニ弁当の容器などのゴミが増えていた。一人暮らしになった蒲田氏の生活が伺えた。

「地元民生委員の話によると、蒲田さんは介護保険サービスの使用をずっと拒んでいたようです。妻の世話は唯一の家族である自分がやる。そう心に決めていたのかもしれません」（遠藤氏）

ここに一つの典型を見る気がする。

これからは頼れる家族が減っていくファミリーレスの時代だ。蒲田氏の選択の是非について言及はしないが、ゴミ屋敷の中で二人きり、老々介護は、辛いことが多かったに違いない。頼るべき娘はずっと以前に亡くなっている。蒲田氏は近所付き合いをせず、夫婦二人の生活を続けた。

「今後はこうした世帯が増えてくると思います。ただ、それ不幸なのかというと私には分かりません」（遠藤氏）

家屋の清潔を保つ能力を失った老夫婦。我々にとってゴミに見えるものも、蒲田家にとっては歴史そのものなのかもしれない。現在、娘と妻の遺骨は、ＬＭＮの東京事務所に保管されている。＝つづく